

王命つて何ですか？2

（元虐げられ才女は無責任な国王を
許さないことにした）

oumei tte
nan desuka?

リヒテル・シュバイツァー
◆◆◆
シュバイツァー王国の国王。
「王命裁判」では
父親である前国王と対立し、
アルジール伯爵家の味方をした。

ロザリア・シュバイツァー
◆◆◆
国一番の大富豪である
アルジール伯爵家の長女で
シュバイツァー王国の王妃。
「王命裁判」にて理不尽な王命に
対抗した過去を持つ。

マリアンナ・アルゴラ
◆◆◆
アルゴラ王国の王女。
スピラノ伯爵家に嫁いでいたが、
離縁したそうで……？

カイル・スピラノ
◆◆◆
マリアンナとイザークの息子。
とある事件に
巻き込まれているようで……？

アリヨージヤ・
アルゴラ
◆◆◆
リヒテルの妹で
アルゴラ王国の王太子妃。
嫁いだばかりのころに
親切にしてくれた
マリアンナを慕っている。

メイナード
◆◆◆
王命で引き裂かれた
ロザリアの元婚約者。
アルゴラ王国で
商売をしている。

イザーク・スピラノ
◆◆◆
スピラノ伯爵家の当主で
マリアンナの元夫。
貴重な宝石である
アルゴライトの加工を
一手に担っている。

Characters

プロローグ

シュツと鋭く風を切る音と共に、男の持つ木剣が私の頭上から勢い良く振り下ろされました。私はそれを素早くかわすと体を深く沈め、今度は反対に下から上へと相手の喉元目掛けて木剣を突き付けます。

すると男は額に僅かに汗をにじませながら、その木剣を避けようと体を後ろに仰け反らせました。私はすかさず、男が体勢を崩したその一瞬の隙を狙って、今度はその脇腹目掛けて屈んだ状態から木剣を打ち込みました。

「うっ！」

男は低いうめき声をあげ蹲りました。

「ねえ、これって私の勝ちよね」

木剣を地面に下し、立ち上がりながらそう声を掛けると……男は体勢を立て直し、まるで信じられないものを見るような面持ちで私の顔を見つめます。

そして、ハッと我に返ったように頭を左右に二度振りました。

「……いや、その……えっと……」

男が戸惑いながら言い淀みます。

私はそんな彼に悪戯いたづらっぽく微笑みました。

「もう！ こういう時は素直に自分の負けを認めるものよ!!」

すると男は、諦めたようにはあゝと一つ……大きくため息を吐きました。

「……そうですね、認めますよ。俺の負けです」

しぶしぶながら認めた彼を、私が微笑んで見つめていると。

「ですが、妃殿下。考えてもみてくださいよ。これ絶対、陛下に怒られるやつじゃないですか。剣術を初めてたった半年の女性に打ち負かされてどうするって……。しかも相手は護衛対象者ですからね」

そう言つて頭を抱えこんだこの男の名はシュルツ・ランガード。

今、彼自身が言つたように、私の専属護衛騎士です。

そして彼が今妃殿下と呼んだ私——ロザリアは、それでもこのシュバイツァー王国の王妃なのです。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

マーカス大陸の東の海に面した海洋国家シュバイツァー王国。

その王都マルナスは、海が齎もたらす温暖で過ごしやすい気候と豊かな海産物資源。そして周辺国に先

駆け港灣整備わんがんせいびに着手したことにより、今では海上貿易の中継拠点として様々な国の商会が軒を連ね、ここに来れば手に入らぬものはないと言われるほどの活気と賑わいを見せていました。

ところが今から二年前、そんなシュバイツァー王国に激震が走りました。

これからの国の進むべき方向性を決定づけたと言つても過言ではない、一つの裁判が執り行われたのです。

今では【王命裁判おうめいさいばん】と呼ばれているその裁判。

訴えられたのは、当時の国王陛下の妹王女ミランダの嫁ぎ先でもある、建国以来から続く名門貴族、ウインダリア侯爵家。そして、訴えたのは他国との貿易業を生業なりわいとしてのし上がり、国への貢献度の高さから叙爵された平民上がりの新興貴族、アルジール伯爵家。

私、ロザリアはそのアルジール家の長女としてこの世に生を受けました。

そしてこの裁判は、ウインダリア侯爵家から不貞を理由に離縁された私の、身の潔白を証明するために起こされたものだったのです。

さて、では何故アルジール家が裁判なんて起こすことになったのか……

まずはその経緯を簡単に説明しておかなければなりませんね？

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

時は更に、この裁判から三年前に遡ります。

当時、私は婚約者であるメイナードとの婚姻を控え、穏やかで満ち足りた日々を送っていました。ところがそんな私にある日突然、借金まみれのウィンダリア侯爵、シグナスの元へ嫁ぐようにとの王命が下されたのです。

え？ 婚約者がいる私に、何故国王陛下がそんな王命を出したのかって……？

答えは簡単。陛下は妹の嫁ぎ先が抱える膨大な借金——それも彼等の浪費によつて作られたものを、アルジュール家に肩代わりさせようとしたのです。

『冗談ではない!! 何故ロザリアが好きな男と別れて、そんな縁もゆかりもない者たちの借金を返済するために嫁がなければならないのか!!』

父は、この王命に怒りを覚えました。

そして、意に添わぬ婚姻から私を逃がすため、他国へ一家揃つて移り住む計画を立てたのです。

ところが……我が家の動きに気付いた陛下はこの国の経済が大きく揺らぐと焦り、メイナードの生家であるローテンバー家に領地替えを仄めかし脅しをかけたのです。

メイナードの故郷であるローテンバー領は、良質な小麦の生産地として知られていました。

でもその小麦は、自然に生まれた物ではありません。長い年月をかけ、土地の改良や小麦自身の品種改良など試行錯誤を繰り返し、ようやく辿り着いた努力の結晶だったのです。領地替えになんてなれば、その全てが水の泡となってしまいます。

その結果、ローテンバー家は王家の指示に従い、父と私を畏に嵌めたのです。

この時、メイナードもまた、生家の側につきました。彼には生まれ故郷や家族を見捨てることが

どうしても出来なかったのです。そして私もまた、自分のために何の罪もないローテンバー家を巻きこむことなんて出来ませんでした。

こうして、私は失意の中、王命に従うことを決めたのです。

それでも縁があつて嫁ぐのです。

シグナスの妻として、しっかりとその役目を果たしていこう……

そう心に決めた私に、更なる試練が降りかかります。

夫となったシグナスは私を妻と認めようとはせず、義母となったミランダも私を蔑み……

嫁いだその日から、私は別邸とは名ばかりの侯爵家の最奥にある粗末な小屋に閉じ込められました。死なないよう最低限の食事だけを与えられ、孤独で息が詰まるような日々を送ることを余儀なくされたのです。

結局、彼等に必要だったのは、私という妻ではなく自分たちの浪費を支え続ける都合のいい金ずるでした。その証拠に私がウィンダリア侯爵家へ嫁いだ時、シグナスにはすでにベアトリスと言う名の愛人がいたのですから。

そう……最初から侯爵家に私の居場所なんてありませんでした。それどころか、ベアトリスの命により私に嫌がらせを繰り返す使用人達のせいで、生死の境を彷徨う始末。

家族にも会えず、こんなところでたった一人……誰にも看取られぬことなく死んでいく……

辛くて、苦しくて、悔しくて……涙が止まりませんでした。

この時、一度は諦めかけた私を救ってくれたのが、侯爵家で家令を務めていたニコラスとその息

子アレックスでした。

彼らのおかげで命拾いした私は決めたのです。どうせ一度は諦めた命。ならばもう絶対に泣き寝入りなんてしない。必ず、私に対するこの仕打ちを白日の下に晒してやる。

そして王命という誰にも覆せない制度を理不尽に使う王家に、必ず一矢報いてやるのだと……

私は、ニコラスとアレックスの助けを借りて父と連絡を取り、王家に抗うための計画を練りました。

その計画こそが、今では広く知られる二年前の裁き——【王命裁判】だったのです。

ですが当時この国の裁判は、王家や権力者たちの都合によって判決が左右される謂わば出来レース。白い結婚の証明書を手に入れるなどして入念に準備を重ねていたとはいえ、裁判は私たちの圧倒的不利に思えました。

でもそんな中、私たちを助けてくれたのが、当時はまだ王太子だったリヒテルだったのです。

「王家や権力者たちが立場にものを言わせ法を悪用する。こんなことを繰り返しては、いずれこの国は法治国家としての体をなさなくなる。それだけは何としても防がなければならない。私はこの裁判を通じ、国があるべき姿に戻したい……」

彼は王太子として、この国の未来を案じていました。

そしてこの国を正しい方向へと導くため、我が家が起こしたこの裁判を利用し、自分の父である国王陛下をその地位から退けようとしていたのです。

この時、リヒテルが考えたのはこの裁判の経緯と行方を広く国民に知らせること。

つまり裁判を劇場型にすることでした。

裁判を通じて次第に距離を縮めていった私とリヒテル……

その後この作戦は功を奏し、紆余曲折の末、裁判は我が家の全面勝訴という形で幕を下ろしました。そして王命という制度を私物化してきた陛下は、民意によりその責任を問われ、王位を追われることになったのです。

全てが終わった後、私は王位を継ぐことになったリヒテルから求婚されました。

「私は考えたんだ。誰となら一生を共に過ごせるかと……。だが、どれだけ考えても……考えを巡らせても……私には君しか思い浮かばなかった……」

そんな、甘すぎる言葉で……

聞くところによると、どうやら私は彼の初恋の相手だったそうなのです。

というのも実は、リヒテルの妹で友好国アルゴラの王太子妃であるアリオーシャ様が里帰りをされた時。使節団の一員としてやってきたアルゴラ国の王女、マリアンナ様の話し相手に選ばれた私に、彼が一目惚れしたのだとか。

とても美しく聡明な上に同い年であるマリアンナ様とすぐに打ち解けた私は、彼女と話すのに夢中でリヒテルの視線にはまったく気づいていなかったのですが……

彼にとつては、思い出深い出来事だったとのこと。

さて、そんなわけでリヒテルから求婚された私ですが、その時はまだ、シグナスと離縁したばかり。それに王位を継いだリヒテルに嫁ぐという事は、即ち、この国の王妃になるということです。

正直に言って、迷いも戸惑いもありました。

リヒテルは、そんな私の不安な気持ちにずっと寄り添い続けてくれました。

そして、裁判から一年が経ちお互い名前前で呼び合うようになったころ、私は彼の求婚を受け入れ、王妃となる決心をしたのです。

と、まあ、こんな過程を経て王家に嫁いだ私。

王妃となった私には、すぐに王家の一員となるために必要な教育が施されることになりました。ええ、世に言う王妃教育ってやつです。

きっと厳しいのだろうなあと不安を抱えながら臨んだ私でしたが、意外や意外、いざ始めてみると、私は自分でも気づかないうちに、王妃として必要な知識のほとんどを既に習得していました。

というのも、私は幼いころから周辺各国に支店を持つ父の商売を手伝うため、様々な国の言語や、情勢、習慣などを学んでいました。国が変われば風俗・言葉・習慣はもちろんのこと、食べるものや着るものでさえ異なります。貿易業を営むアルジュール家に生まれた私にとって、それらを理解するのはむしろ当然のことだったのです。

執務に関してもそうです。常日頃から決算書や契約書など様々な書類の見方を父に教わっていた私は、書類を見るという事に慣れていたのか、ちっとも苦にはなりませんでした。

そんな訳で、周囲が驚くほどの早さで王妃教育を全て終了してしまった私に、リヒテルがしっかりと笑いかけてました。

「君には参ったよ。まあ、私はそんな君が誇らしかったがね」

あら、機嫌が良さそう……

王妃教育が早々に終わったのです。リヒテルを助けるためにも、本来なら一日でも早く彼と共に執務をこなすのが当然のことなのでしょう。

ですが私には、どうしてももう一つ、学びたいことがあったのです。

「お願いがあるの」

「なんだ？ いきなり……」

話を切り出した私に、リヒテルがそう言って訝しげな瞳を向けました。

「実は王妃教育の中に武術を追加してほしいの」

「武術って……何を学びたいんだ？」

確かに彼の言う通り、ひとえに武術と言っても剣術や体術、柔術など多岐にわたります。

「全部よ。私は自分の身を自分で守る術を身につけたいの」

「全部だって！」

案の定、これを聞いたリヒテルは危険だからと猛反対。

「王妃である君には常に護衛がついている。それなのに何故そんな必要がある？ だいたい、もし怪我でもしたらどうするつもりだ!？」

でも、私は諦めません。

「リヒテルにだって常に護衛が付いているのに、武術を当然のように学んでいるじゃない。それなのに、どうして私が学ぶことには反対するの？ 同じ王族なんですもの。危険なことに変わりはない」

いわ。いえ、むしろ女の私のほうが、力がない分狙われやすいでしょう？」

そう……。たとえリヒテルにどれだけ反対されても、私にはどうしても武術を学ぶことを諦められない理由があったのです。

実はリヒテルに嫁いですが、私は彼の母である側妃^{そけい}リアーナ様から、彼の生い立ちについて話を聞いていました。

リヒテルの父である先王——ハインツ様に嫁ぐ前、リアーナ様には婚約者がいました。相手はグリードマン伯爵家の嫡男^{ちやくなん}ジェラルド様——リヒテルの側近であるジャックのお父様です。

リアーナ様とジェラルド様は互いに愛し合っていました。ある夜会でハインツ様に見初められたリアーナ様は、王命により側妃として召し上げられたのです。

「最初は私も抗おうとしたわ。でも出来なかった……。相手は王家。貴族の家に生まれた私には、自分の幸せを犠牲にしても、家や領民達を守る義務があったの」

私にはこの時のリアーナ様の気持ちに手が取るように分かりました。何故なら私も、王命によって大切な人との仲を切り裂かれたのですから……

でも、ことはリアーナ様が側妃として嫁ぐだけでは収まらなかったのです。

ハインツ様は非常に嫉妬^{しつとぶか}深い方で、その醜い嫉妬心の犠牲になったのがリヒテルでした。

ハインツ様は、ジェラルド様とリアーナ様が夜会で顔を合わせることさえも嫌がり、ジェラルド様を王都から追い出すために、ありもしない噂を流したのです。

そう、側妃として嫁いですがすぐに身籠^{みごも}ったリアーナ様のお腹の子——リヒテルは、リアーナ様と

ジェラルド様の間に出来た子供だという噂を……

そして、ハインツ様の目論見通りジェラルド様が王都を去ったあとも、リヒテルは自分の父親が流したその噂のせいで、周囲からの好奇の目に晒され続けることになったのです。

「私は、その噂はミランダ様や王妃様が私を疎んで流したのだと思っていたの。でも違ったわ。まさか父親が、醜い嫉妬のために自分の子を犠牲にするなんて……。私には到底信じられなかった。

でも、その時はじめてわかったの。あの人はリヒテルにだけはいつも冷たかった。恐らくリヒテルはあの人のとって、後ろめたさの象徴だったのよ」

リアーナ様は、そう言って唇を噛みました。

そういえば裁判の前、リヒテル本人からも聞いたことがありました。

『幸いなことに、大きくなるにつれ父に容姿が似てきた。だが、もしそうでなかったら、恐らく自分は父に廃嫡^{はいちやく}されていたろう……。』と……

彼自身がそう思うほど、ハインツ様とリヒテルの間には大きくて深い溝があったのでしよう。

裁判が終わり、王位を退いたハインツ様は、王宮を離れ離宮へと移ることになりました。

「あの人は私に離宮へついて来てほしいと言ったわ。でも私は行かなかった。あの人のことがどうしても許せなかったから……。それにリヒテルには王宮の中に信じられる人が少ない。だからこそ私はここに残って、私なりの方法であの子のことを支え続けたいと思ったの」

私なりの方法で支え続ける……。その言葉を聞いて思いました。

リアーナ様の言う通り、実の父を追い落とす形で国王となったりリヒテルに、王宮内に味方が少な

いのは事実です。

先王の側近たちに、正妃であつた王太后と縁戚関係にある公爵家……

彼らは、裁判によつて国民を味方につけたリヒテルに今は従順なふりをしていますが、いつ牙をむいて襲ってくるかわかりません。

リヒテルが少しでも隙を見れば、その隙を彼らは見逃さないでしょう……

そんな政治的に不安定な立場であるリヒテルの後ろ盾こそが、この国の経済の中心にいるアルジール家の当主——私の父であるスペンサーなのです。

だからこそ、その娘である私は、王妃として絶対に揺らぐことがあつてはならない。そのためには、どんなことがあつても決して動じぬよう、心も体も強くならなければならない。

それが、リヒテルを支えるための私なりの方法。

そう考えた私は、まず物理的な意味での強さを手に入れることにしたのです。

私はリヒテルに訴えかけます。

「侯爵家での三年……私は何度も思つたわ。もし、今、私にこの状況に抗うだけの力があつたなら、こんな地獄のような場所からすぐに逃げ出すことが出来るのにつて……。でも、当時の私にはそれがなかった。そのせいで私は、辛く苦しい時間を延々と過ごし続けることになってしまつたわ」

そしてリヒテルの後ろに控えるジャックに目を向けました。

彼はリヒテルに仕える前、貴族裁判の調査官をしていました。

そして、王命裁判の担当でもあつたのです。

「ねえジャック、覚えている？ 私が離縁してアルジール家に戻る日、貴方は私にこう言つてくれた『貴方はついていて。あの家には、ニコラスさんがいましたからね』つて……」

「……ええ、勿論、覚えていますよ」

ジャックが戸惑いがちに頷きます。

「そう……確かに私はついていて……。でもね、彼がいなかったら、私はあの時すでに命を落としていたかもしれない……。それだけじゃない。シグナスが私を襲えと命じた相手がアレックスではなく、他の誰かだったら？ 私はその時、この身を汚されていたかもしれないのよ。今でもそう考えると、怖くて体が震えるの。だつてそうでしょう？ そのどちらだったとしても、私は今、ここにはいられなかったわ。リヒテル、貴方の妻として、今、こうしてここにはいられなかったの」

私はそう言つてまたリヒテルに視線を戻しました。

結婚してからのリヒテルは、いつも私の意見を尊重し、大切に寄り添つてくれます。

そのおかげで今、私はとても幸せだと胸を張つて言うことが出来る……

でも……幸せを感じれば感じるほど、私は思うのです。

リヒテルはこのシユバイツァー王国の国王です。

その妻である私は、ただ守られているだけの弱い女ではいけないのだと……

「もし、また私の身に何か困難が降りかかった時、今度も以前のようにつぎが私の味方してくれるとは限らないでしょう？」

すると、ようやく私の想いが通じたのか、リヒテルは深く息をはくと、専属護衛騎士のシユルツ

に私への武術の指導を命じたのです。

「あまり無理はしないようにな」との言葉を添えて……

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

こうして、ようやく叶った武術の授業。半年間必死に頑張つて今日初めて、たった一度だけです
がシュルツを打ち負かすことが出来ました。

「妃殿下、このこと陛下に内緒にしておいてくれたりはしません……よね？」

そう言つてシュルツは私の顔を覗き込むと、媚^こびを売るように両手を顔の前ですり合わせます。
その時です。

「残念だったな、シュルツ。今の話、全て聞かせて貰ったぞ」

声と共にリヒテルが颯^{さつ}爽と姿を現しました。

「うわっ」

突如現れたリヒテルに、シュルツが腰を抜かしそうなほど驚いて声を上げました。

そんな彼をよそに、リヒテルは甘い笑みを浮かべながら私に歩み寄つて肩を抱き、耳元で優しく
語りかけます。

「ロザリア、そろそろ伯爵が来られる時間だよ」

いや、ちょっと！ 近すぎます!! 何故そんな耳元で話す必要があるの？

リヒテルは、きつとわざとやっている。

それが分かっていながらも、私は自分の顔が赤く火照^{ほて}つていくのを感じていました。

悔しくて、何気ないふりを装つて答えました。

「……あら、もう、そんな時間？」

数日前、どうしても私たちの耳に入れておかなければならない話があると、父から先づれが届い
ていたのです。

「あつ、それからロザリア。暫くの間、君の指導には誰か代わりの者を当たらせることにしたよ」
リヒテルがまるで今、思ひだしたかのようにそう告げました。

「えっ……」

途端に分かりやすく、シュルツの表情がこわばります。

そんな彼を見て、リヒテルは口角を少し上げ悪戯な笑みを浮かべました。

「その代わりシュルツには、鍛錬の量を今までの倍にするよう騎士団長に伝えておこう」

「えっ!? 倍!？」

シュルツが目を剥きます。

「当たり前だ。護衛対象に敗れただけではなく、こともあろうにそれを隠蔽^{いんぺい}しようとするなどもつ
てのほかだ！ だいたいお前、ロザリアが女性で初心者だからと侮^{あなづ}つて油断していただろう？ だ
から動きが単調になりすぎてロザリアに見切られたんだ。そんな奴に私の大切な妻の護衛を任せて
いられるか！ 初心に戻つて一から鍛えなおせ!!」

リヒテルはシュルツにそう一喝すると、「それじゃあ、行こうか」と私を見やり、一転してまた甘くとりけるような顔で微笑みかけます。当然私の肩は、彼に抱かれたまま。

「しかしまあ、陛下が自ら妃殿下を迎えに来られるなんて。なんのために使用人がいるんだよ。しかもあの惚けた顔……。一体どれだけ妃殿下のことが好きなんだか……」

聞こえていないかと思っているのか、立ち去る私たちの背中越しに軽口を言うシュルツ。

「ふん。惚けた顔で悪かったな。だいたい、夫が妻のことが好きで何が悪い。仕方ない。あいつの鍛錬はいつもの三倍にするよう、騎士団長には言っておこう」

本気なのか、冗談なのか……シュルツの軽口に答えるようにリヒテルが呟きました。

リヒテルに嫁いで約一年。彼は当たり前のように、こうして私に接してきます。

それも、騎士を筆頭とした臣下たちからかわれるくらいには頻繁（ひんぱん）に！

でも私は、彼のこの甘さにまだ慣れることが出来ないでいるのです。

顔を赤らめたまま俯く私を、リヒテルは優しい目で見つめています。

このあと、私の顔の火照りは暫くの間、収まることはありませんでした……

第一章

湯あみと着替えを済ませた私は、リヒテルと共に父が待つ応接室へと向かいました。

「それで伯爵。早速で申し訳ないのですが、話とは？」

どうしても耳に入れない話……。父からの先触れに記されていたその言葉が余程気になっていたのか、リヒテルは挨拶もそこそこに、すぐに話を切り出しました。

父は一度軽く頷くと、リングケースを一つ、テーブルの上に置きました。

「実はお二人にこれを見て頂きたいのです」

父のその言葉に、リヒテルはすぐにテーブルの上のリングケースを手にとると、蓋（ふた）を開けました。「……アルゴライトですね。見事なものだ。これだけの大きさのものはなかなか目にしません」

リヒテルが感嘆の声を上げます。

彼の言うアルゴライトとは、光の角度によって色を変えるとも珍しい宝石のことです。

その名の通りアルゴ王国でのみ採掘されるその宝石は、その希少さ故、市場では非常に高値で取引されています。今日、父が持ってきた指輪ほどの大きさならば、恐らくこれ一つで王都に立派な屋敷が建てられるほどの価値があるでしょう。

ですが、この後続けられた父の言葉は、私たちにとって思いもよらないものでした。



「ええ、ただしもし本物であれば……の話ですが……」

その言葉を聞いて、途端にリヒテルが顔を曇らせました。

「本物であれば……？　つまりこれは偽物……そういうことですか？」

父は瞳を伏せると、ゆっくりと首を横に振って一言。「残念ですが」と、そう答えました。

「そんな……」

私たちは息を飲みます。

残念……父の口から出たその言葉の意味を、誰よりも分かっていたからです。

「陛下もご存じだとは思いますが、アルジール家の営む商会で仕入れられた宝石は、全ての商品に対し一つ一つ鑑定を行っております。ですが、流石にこの指輪が偽物だという知らせを受けた時は私も信じられず、わが家が抱える複数の鑑定士に再鑑定をさせました。ですがどの鑑定士も皆、答えは同じだったのです」

この時、父が信じられないと言ったのには訳がありました。

アルジール家の営む商会で仕入れられた宝石は、鑑定士による鑑定が必ず行われる……父はそれを大々的に公表しています。この話は業界の中では知らない人がいない程有名な話。

つまり、アルジール家の荷の中に偽物を紛れ込ませても、必ず見つけられる……その事実こそが抑止力となり、ここ何年もの間、アルジール家の仕入れた商品の中に偽物が混ざっていたことなど一度もなかったのです。

「……つまり、これが偽物というのは間違いない。そして、伯爵がわざわざこうして訪ねて来られ

たということは、このアルゴライトは正・規・の・ル・ー・トで仕入れられたもの……そういうことでしょうか？」

堪らずリヒテルがテーブルに身を乗り出しました。

それほどの衝撃が、この話にはあつたのです。

「はい、その通りです。ですから早急に陛下のお耳にと思い、こうして参上したわけです」

正規のルート……リヒテルが父にわざわざそう確認したのにもまた、理由がありました。

アルゴラ王国でしか採掘されない希少な鉱石……アルゴライト。

石自体が持つ美しさは勿論ですが、実はその希少性こそがアルゴライトの最大の魅力でした。

そのためアルゴラ王国はその希少性を損なわぬよう、鉱石の採掘、加工、販売までの全てを国家戦略とし、国が一括して徹底的に管理しています。

そんなアルゴライトを仕入れる手段は二つ。

アルゴラ王国から直接買い付けるか、一度市場に出回った品を買い入れるのみです。

つまり、今リヒテルが言った正規のルートとは、アルゴラ王国から直接買い付けたという意味。

そして国が一括管理している以上、その中に偽物が混入していたということは、アルゴラ王国自体がそれに関与しているのではないかと疑われても仕方がない状況にあるということなのです。

それが、父がこの話を早急に私たちの耳に入れなければならないと言った理由でした。

「そんな、バカな……。アルゴラはアルジール家がロザリアの生家だということは知っているはずだ……」

リヒテルはそう言つて手で口元を覆いました。その手は心なしか震えているようにも見えます。それもそのはず。

アルゴラ王国の王太子のもとには、リヒテルの妹王女であるアリョーシャ様が嫁いでおられます。そのため、アルゴラ王国とシュバイツァー王国は友好国として協力関係にあつたのです。

王女が嫁ぐほどの友好関係にあるはずのアルゴラが、そうと知りながら偽物を混入させた……友好国としての関係性にひびが入つても仕方のないレベルの話です。

リヒテルが信じられないのも無理もないことでした。

ですが、今はそんなことを言つていられる状況ではありません。

何故ならアルゴライト関連の事業は、今やアルゴラ王国にとって、国の経済を支える基幹産業きかんざんぎょう。そしてアルゴライトを扱う商人たちは、国が管理しているからこそ、その品質に全幅の信頼を寄せてきたのです。その中に偽物が一つでも混入していたとなれば、また話は違ってくるはず。

しかも偽物が見つかったのは、友好国であるシュバイツァー王国の王妃の生家が経営する商会。本来ならありえないことで、そのありえなさが、この問題を更に大きくさせるのです。

こんな話が公になれば、我が国だけでなく他国の商人たちもみな疑心暗鬼ぎしんあんきとなり、アルゴライトの上に築かれた信頼は簡単に揺らぐでしょう。

もしそうなれば、アルゴラ王国にとっては一大事です。

何しろ、経済の基盤もまた、揺らいでしまうのですから……

父はその問題をはっきりと口にしました。

「陛下、こうなった以上、偽物がこれ一つとは限りません。最悪の場合、これが皮切りとなる可能性も捨てきれないのです。シュバイツァー王国はこれまで海上貿易の中継拠点として繁栄してきました。その我が国が、他にも偽物が混入している可能性があること知りながら、このままなんの手立ても取らず放置し続けたとしたら、この国の信頼にも関わります。だからと言って、もし我が国が今の段階でことを公にすれば、今度はアルゴラ王国とアルゴライトへの信頼が揺らぎます。それもまた、我が国の経済や隣国間での立ち位置に大きな影響を及ぼすでしょうし、アルゴラ王国とこれまでのような関係ではいられなくなるかと」

つまり、我が国がこの後どう動くかが問題になってくるというわけです。

国の信用を取るか、アルゴラ王国との関係性を取るか……

父が突き付けたこの選択は、リヒテルがこの国の王である限り、既に答えは決まっていました。

それでも、リヒテルの顔が苦悶に歪みます。父親からの愛情を知らずに育った彼にとって、リアーナ様を含む妹たちは何ものにも代えがたい大切な存在だったからです。

その時、リヒテルの瞳がまるで何かを思い出したかのように大きく揺れました。

「どうかしたの？」

その様子を不審に思った私が尋ねると、リヒテルは戸惑いがちに答えました。

「……実は六年前、アルゴライトの真偽を巡って、訴えが起こされたことがあったんだ」

「……六年前？ ああ、あの件ですね」

父がゆっくりと頷きます。

「え？ お父様もご存じなのですか？」

「当たり前だ。私を誰だと思っている？ 貿易商の間ではかなり有名な話だ。ですが陛下、あの件はすでに解決済みではなかったですか？」

「解決済み……？」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

この後、事情を知らない私のために、リヒテルが当時の話をかいつまんで説明してくれました。

リヒテルは国王となつてから、先王の時代に理不尽な判決によって運命を狂わされた人々を救おうと、法務大臣のベルナールやジャック達と共に、過去の判例を洗い出していたのです。

その中の一つが、六年前のアルゴライトについての訴えでした。

被告側——訴えられたのはチアーズ子爵。原告側——訴えたのはとある宝石店です。

事の発端は、よくある買物でした。

チアーズ子爵は娘の結婚祝いにと、宝石店でアルゴライトを中石に使ったネックレスを注文しました。そして念のために、アルゴライトを鑑定に出したのです。

ところが、子爵に雇われた鑑定士は、そのアルゴライトを偽物だと鑑定したのです。当然、子爵は宝石店に苦情を申し入れ、ネックレスの購入を拒みました。

ですが宝石店も黙ってはいません。そのアルゴライトは正規のルートを使い仕入れたもの。偽物

だなんてありえないと、子爵に宝石の買取りを求め、訴えを起こしたのです。

「……それで……。その裁判の結果はどうなったの？」

「いや、裁判は行われなかったよ」

「えっ!? わざわざ訴えまで起こしたのに!？」

驚きで目を見開きます。

「……ああ。簡単なことだ。そのアルゴライトが本物だと証明されたんだよ。王家が派遣したもう一人の鑑定士によつてね」

リヒテルが言うには、訴えを起こした時点で宝石店側もまた、そのアルゴライトは本物だという別の鑑定士による鑑定書を提出していました。つまりこの時点で裁判所には、二人の鑑定士が提出した、全く意見の異なる二つの鑑定書があつたわけです。

ならば、どちらの鑑定が正しかったのか……もう一人、別の鑑定士に鑑定を依頼すれば真実が明らかになるのではないか……どういう訳かこの訴えに王家が介入し、そう主張したそうなのです。その上、どうせならば最も信頼できる鑑定士をと、王家御用達のダミアンという鑑定士をわざわざ派遣したとか。

結果として、ダミアンはそのアルゴライトを本物だと鑑定し、予定通りチアーズ子爵がネックレスを買い取ることでの訴えは解決したそうです。

「だったら何も問題はないのでは？」

そう言つて首を傾げる私に、父は当時間も抱いていたという疑問を口にしました。

「表向きはな。だが、なぜ個人の商取引を争う訴えにわざわざ王家が関与してきたのか……？ それと当時、この話を聞いた私がかつとも気になったのは、なぜ宝石店は訴えまで起こしたのかという点だった」

「それはアルゴライトが高価だからではないのですか？ だつてそのネックレスは注文された品なんですよ？ 取り寄せた商品を買ってもらえなければ宝石店は損をするでしょう？」

「ああ、普通ならな。だが、アルゴライトとなれば話は違つてくる。ロザリアの言う通りアルゴライトは高価だが、その分、希少で人気がある。恐らく子爵は注文してから手に届くまで半年以上は待つたはずだ」

「半年……そんなに？」

思わず声を上げ、手で口を覆います。

「ああ、特に十年ほど前からアルゴラは、アルゴライトの輸出量を徐々に減らしてきている。そのせいで、アルゴライトは価格も希少性も今までより更に高くなつた。訴えた相手は宝石店。アルゴライトを待たずに購入できるとなれば、必ず他にも購入者はいたはずだ。裁判まで起こしたという事は、宝石店は余程その宝石の真偽に自信を持っていたのだろう。ならばこの場合、私なら訴えなど起こさず、新たな購入者を探しただろう……」

確かに父の言うことは最もなこと。裁判なんて起こしたつて勝てるとは限りません。他の誰かに売ることが出来るなら、その方がよほど手っ取り早いですからね。

「でしたら逆に、伯爵がこの宝石店の立場なら、どんな場合ならば訴えを起こされますか？」

今度はリヒテルが父にそう問い掛けました。

その問いに父は暫く考え、やがて口を開きます。

「そうですね……必ず勝てると保証されている場合でしょうか……」

リヒテルは確認するように、父に再び問いかけます。

「つまり訴えそのものが出来レースだった……ということでしょうか？」

出来レース……リヒテルが放ったその言葉に息を飲みました。

「伯爵、裁判にさえならなかったこの話に、何故私が興味を持ったか分かりますか？」

「……当時、新聞に取り上げられたからですか？」

父はすぐにそう答え、リヒテルが大きく頷きます。

「ええ。それもまるで燻^{くも}りかけた火に、水をかけて完全に消すように大々的にね」

リヒテルのこの言葉に、私も父も言葉を失います。

「六年前のあの時期は、丁度アリオシャがアルゴラの王太子に興^{おこ}入^いれする直前でした。そしてそのアルゴライトが、宝石店の言うように正規のルートで仕入れられたのだとすると……。伯爵ならこの意味がわかるでしょう？」

「なるほど。そのアルゴライトがもし本当に偽物だった場合、今回と同じ問題が生じる。だから先王はアリオシャ様が興入^{おこ}れされる前に、きちんとした形でこの疑惑に決着をつけておきたかったと、そういう事でしょうか？」

父が頷きながら答えます。

「それならばよいのですが。もしこの訴えが最初から仕組まれたものだとしたら、父は二国の間に波風が立たぬよう、双方にとって最も望むべき形となるよう取り計らったのかもしれない……」

父からの問いにそう答えたりヒテルは、悔しそうに顔を歪ませ俯きました。

「……つまり偽物のアルゴライトを本物だと偽るためにわざと訴えを起こさせ、その偽りの結果を周知させるために新聞を利用したと……陛下はそうお考えなのですか？」

「さすがに父もそこまでではないと思いますが……」

信じたいのに信じることが出来ない……伏せられたリヒテルの瞳から、彼の抱く感情が手に取るように分かった私は、この雰囲気を変えようと声を上げずにはいられませんでした。

「だったら、そのダミアンっていう鑑定士に話を聞いてみたらどうかしら？」

もしダミアンが当時、鑑定結果をわざと偽って報告していたのだとすれば、それは間違いなく王家の意向に従ったから……それ以外の理由なんて思い浮かびません。

だったら話は簡単。相手は王家御用達の鑑定士。

国王が変わった今なら、きっと本当のことを教えてくれるはず。

そう思ったのですが……

リヒテルは静かに首を横に振りました。

「残念だがダミアンはすでに亡くなっているよ」

「亡くなった……？」

「ああ、当時、既にかかなりの高齢だったからね。そういえば伯爵、ダミアンはこの鑑定を最後に鑑定士を引退したのではなかったですか？」

「……そう言えば、確かにそうでしたね」

父が記憶を呼び起こすかのように顎に手を当てながら、リヒテルからの問いに答えました。

「それに、当時のことを問い質し、王家の関与はなかったと否定されたとしても、私はその答えを素直に信じることは出来ないでしょう……」

リヒテルが漏らしたこの言葉に、私は彼の心の奥にある父親への複雑な心境を垣間見たような……そんな気がしました。そして……

「父は、また間違えたのか……」

そう言ってリヒテルは、悔しそうに天を仰いだのです。

彼の発したこの一言で、応接室は静寂に包まれました。

「でも、まだそうと決まった訳じゃないわ！　だっておかしいじゃない。それ以降、今日までアルゴライトの偽物はまだ一つも見つかっていないのでしょう？」

私は堪らず声を上げました。

続いて父も言葉を発します。

「確かにロザリアの言う通りです。それに陛下、チアーズ子爵にお会いになるのはいかがですか？　六年前のアルゴライトは、彼が買い取ることになったのです。それを拝借し、アルジール家の雇う鑑定士たちにもう一度鑑定させましょう。そうすれば少なくとも六年前に起こされた訴えの真実は

明らかにするはずですよ」

確かに。その手があったわ！　だったら善は急げ。

「こんなところでうじうじ考えていても仕方ない。気になることがあるのなら、さっさと確かめに行きましょう。行動あるのみよ！」

こうして、私とリヒテルは早速、チアーズ子爵家へと向かうことにしたのです。

子爵家へ向かう馬車の中、リヒテルがポツリと漏らします。

「なあ、ロザリア。もし、子爵が持っているアルゴライトが本当に偽物だったとしたら、父はアルゴラ王国に対して誤ったメッセージを送ってしまったのかもしれない……」

「誤ったメッセージ？」

私はそのリヒテルの言葉を繰り返しました。

「ああ、わが国ならたといえ偽物だと分かっているけど、黙って見過ごすと……」

それは一番考えたくないシナリオでした。

「今回のこと、穿った見方をすれば、そう見えてしまうんだ。一度便宜を図れば、相手はその次もと考える。今回は大丈夫だった。ならば今回も大丈夫だろう……とね」

彼は今回、アルジール家の荷の中から偽物のアルゴライトが見つかったという一点がずっと気になっっているようです。

「何故確実に見つかるかと分かっている、わざわざアルジール家の荷の中に偽物を紛れ込ませたのだろ。偽物を扱う時は、バレないように慎重になるものだろう？　しかもアルジール家は王妃の生

家。すぐに王家に情報が共有されると分かっているだろうに……」

彼の言う通り、それではまるで見つけてくれと言わんばかりの行いです。

「まさかりヒテルは、アルゴラ王国は我が国が今回の件にどう動くかを試していると、そう思っているの？」

「……分からない。ただ六年前の真実が分かれば、その辺りのことも見えてくるのかもしれない……」

彼はそう言うと、それからはずっと馬車の外の景色をただ眺めていました。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「両陛下が子爵家なんぞにわざわざ揃ってお越し下さるとは、一体どういったご用件でございましょう？」

通された応接室。私たちと対面したチアーズ子爵は、そう言って訝し気な表情を浮かべました。その顔を見ただけで、彼が王家に対しあまりいい印象を持っていないことが見てとれます。

でも、何故……私は疑問を抱きました。

確かに六年前、チアーズ子爵は王家が派遣した鑑定士のせいで、アルゴライトを買い取るになりました。ですがそれは、娘の結婚の祝いにと、子爵が元々買い求めていたもの。

しかもそのアルゴライトは本物と断定されたものなので、不信感を抱くとしたら最初に偽

物と鑑定した鑑定士に対してで、彼が王家に不信感を抱く理由なんてないはず。

「六年前、子爵が購入したアルゴライトのネックレスを貸してはもらえないだろうか」

リヒテルが用件を伝えます。

その言葉に、チアーズ子爵は戸惑いを隠そうともしませんでした。

「あれを貸してほしい？ 今更そんなことを仰られても、あれからもう六年も経っているのです。残念ながらとくに売ってしまいましたよ」

「………売った？ だがあれば、子爵が令嬢の結婚の祝いにしようと買い求められたものだと言っていたのだが、違ったのか？」

今度はリヒテルが、怪訝な顔でチアーズ子爵に問いかけます。

「だからこそですよ。あんな一度けちのついたもの、大切な娘の結婚祝いに出来ると思いますか？ だったら売って別の物を……。そう考えるのが親として当然のことではありませんか？」

けちの付いたもの……チアーズ子爵は堂々とそう言い放ったのです。

「だってそうでしょう？ 娘の結婚を祝うはずの物が偽物だと言われたのですよ？ 親なら誰だっ
ていやでしょう？」

「だがあれば、鑑定の結果本物だと証明されたはずだ」

「例えそうであったとしても、一度けちのついた物は、けちのついたものですよ！」

チアーズ子爵はそう言って慥然とした表情を見せます。

その態度に違和感を抱いたのか、リヒテルは彼に全く違う質問を投げかけました。

「子爵、もしかしたら、ネックレスを売ったのには他に理由があったからではないのか？」

ですが、チアーズ子爵は反対に不信感をより深めたのか、眉を寄せました。

「何故そんなことをお尋ねになるのです？ 陛下が何を仰りたいのかは分かりませんが、あのネックレスは六年前、我が家がい求めたものです。それをどうしようと王家には何の関係もないはずです。それとも何ですか？ あれを売ってはならない何か特別な理由でもあったのですか？」

「……それは」

リヒテルが言い淀みます。

「……やはりお教えくださいませんか？ でしたら私が代わりにお答えしましょう。もしかしたら、今になってあれが偽物だったのではないかと疑うような出来事があったのではないですか？ それ以外に六年も経って、今更王家があれに興味を持つ理由が分かりません」

その口ぶりで分かりました。

やはりチアーズ子爵は、あのアルゴライトが偽物だという可能性を捨てきれずにいたのです。

だから売った……。大切な娘の結婚祝いに偽物かもしれないものを持たせたくなかったから……恐らくそう言うことでしょう……

そのチアーズ子爵の想いを証明するように、彼は私たちが屋敷を訪れてからずっと、アルゴライトとは言わずあれと呼んでいましたから。

「……子爵のほうこそ、本物だと再鑑定されたにもかかわらず、何故あのネックレスに使われていたアルゴライトが偽物かもしれないと疑い続けているのですか？ だからお売りになったのですよ

う？ 違いますか？」

今度は反対に私がチアーズ子爵にそう問い返しました。

「……私が疑っている？ 王妃殿下は何故そう思われるのですか？」

「子爵がそのネックレスを手放されたからです。アルゴライトは希少性の高い宝石。商品としてアルゴライトを扱うことの多い私の父は、恐らく子爵は注文されてから半年以上は待たれたはずだと言っていました。それだけ待ってようやく手に入れたのです。思い入れの深い品だったはずなのに」

「ほう……アルジール伯爵がそんなことを……。ええ。その通りですよ。欲しくて欲しくてようやく手に入れた。ですが、半年ではありません。一年近く待ちましたよ」

「……一年……」

思わずまた口にしてしまいました。

やはりそれほどにアルゴライトは希少な宝石なのです。

「だったら尚のことおかしいではありませんか？ それほど欲しかったネックレスを何故お売りになったのですか？ そこには必ず何か理由があったはずですよ」

するとチアーズ子爵は諦めたのか、ようやくその重い口を開いたのです。

彼はとても静かな声で私たちに告げました。

「陛下、王妃陛下。たった一つの宝石が、人の人生を狂わせることもあるのです。あの訴えが起こされたせいで、キースのそれからの人生は大きく変わってしまいました」

「キース？」

「あの時我が家が雇った鑑定士の名ですよ。将来を嘱望しきぼうされた優秀な鑑定士だったのですがね」
そう言つてチアーズ子爵は、自身が抱く苦悩を語り始めました。

「私はね。裁判所であれが本物だと断定された時、最初はキースを恨みましたよ。それこそ本当に娘の結婚にけちがついたような気がしましてね。こんなことなら最初から鑑定になんか出さなければ良かったと悔みもしました。ところがそれから暫く経つて、私の元にキースが訪ねて来たのです。自分は絶対に鑑定ミスなどしていない。誰が何と言おうとあれは絶対に偽物なのだとね。そしていつの日か真実を明らかにするための証拠として、あのアルゴライトを自分に売ってほしいと……そう言つて頭を下げたのです」

「では子爵がアルゴライトを売った相手というのは……」

「ええ、そのキースです」

そう言つてチアーズ子爵は沈痛な表情を浮かべます。

「王妃陛下。商人の家に生まれたあなたなら、アルゴライトがどれほど価値のある宝石かはお存知でしょう？」

「………ええ」

私はチアーズ子爵からのその問いに頷きました。

「だからキースはあれを買う金を用意するため、当時自分が住んでいた家まで売ったのです」

「……家を？」

「ええ、そうです」

今度はチアーズ子爵が頷きました。

「当時、この話は何故か新聞で大々的に報じられていました。そのせいで、キースの鑑定ミスは公のものとなり、彼は鑑定士として、ほとんどの仕事を失っていました。それなのに彼は、家まで売って有り金全てを持ってここへやって来たのです。彼のその姿を見たとき、私は疑心を抱いたのですよ。彼の言う通り、やはりあれは偽物だったではないかとね」

つまりそのキースという鑑定士は、自分の鑑定が正しかったことを証明するために、自分の持つ全てを投げ打つてでも、あのアルゴライトを子爵からの買い求めたということ……

言い換えれば、それだけ自分の鑑定に自信を持っていたということでしょう。

「鑑定士としてのプライドか……」

リヒテルが囁くような小さな声で呟きます。

ですが、その声はチアーズ子爵にも届いていたようです。

「ええ」

彼は頷きました。

「私はね、陛下。格上の伯爵家に嫁ぐ娘に、一つでも誇れるものを……そんな思いから、それこそ節約に節約を重ね、やつとの思いであれを買い入れたんです。だからこそ、キースの姿を見て、やはり偽物かもしれないと疑ってしまった以上、娘に持たせることは出来ないと思った。反対にキースはあれが偽物だと思ひながらも欲しいと言つた。この時、私たちの利害関係は一致したのです。」

だから私はキースにあれを売ることになりました」

確かに子爵の気持ちは良く分かります。誰だって偽物かもしれないものを大事な娘の……しかも結婚祝いなんて、送りたいくはないですからね。

最初に子爵が言った通り、売れるものならば売って何か別のものを……

そう考えるのが普通でしょう。

「ですが……キースが我が家にやって来なかったとしても、私はやはりあれを手放していただろうとも思います。今でこそ言いますが、届いたネックレスを初めて見た時に感じたのです。輝きが足りない……」

「輝き……ですか？」

リヒテルがチアーズ子爵の言葉を繰り返しました。

するとチアーズ子爵がまた、頷きます。

「ええ。陛下、私は以前、本物のアルゴライトを見たことがあるのですよ。……本物は、あれのような輝き方をしていなかった」

本物の……と彼は言いました。つまりチアーズ子爵はすでに、そのネックレスに使われていたアルゴライトは偽物だったのだと心の内で確信しているのでしょう。

「あれが本当に偽物だったとしたら、私はキースにどう詫びていいのか分からない。ただ違和感があるからと彼に鑑定を依頼し、その結果を精査することなく宝石店に文句を言った結果、私の手には負えないくらいのものであった。……そのせいで彼の人生は大きく狂わされてしまったの

ですから」

チアーズ子爵の顔が苦痛で歪みます。彼は心から、過去の自分の行いを後悔していました。

恐らく彼は、私たちが揃って現れたことで、長年抱き続けてきた疑念を確信に変えたのでしょう。最初にチアーズ子爵に感じた違和感——王家に不信感を抱いているのもそのせいに違いありません。

私はそんなチアーズ子爵を見て思いました。

なぜ彼がこんなに苦しまなければならないのかと。

彼は高価な品物を購入した者として当然のことをしただけです。宝石店もまた、自分の店の商品を本物だと主張するのは、ある意味当たり前のこと。店の信用に関わりますからね。

鑑定士だって、人間ですから間違ふことはあります。当時、チアーズ子爵が訴えたように他の鑑定士による再鑑定がきちんと行われていたら、当事者間で静かに終わる話のはずでした。

ですが、王家が突然首を突っ込み……偽物と知りながら嘘の鑑定結果を提出させたとなると。

そりゃあ、子爵が王家の人間である私たちを恨むのは当たり前のことです。

「陛下、王妃陛下。何があつたかは知りません。そんなこと、今の私にはもうどうでもいいのです。ですがどうかお願いします。キースのためにも必ず真実を明らかにしてあげてください」

そう言っただけで私たちが頭を下げたチアーズ子爵の顔は、その鑑定士への罪悪感に苛まれているように見えました。私はそんな彼に問いかけます。

「子爵、そのためにも、どうしてもあの時のアルゴライトが必要なんです。子爵はそのキースさんが今、どこにいるかご存じではないですか？」

すると彼はゆっくりと頷きました。

「ええ、知っています……。あれを売ったとき、私は彼のその後の生活が心配になりました。だから今は、我が家で御者として働いてもらっています」

結局、そのキースという鑑定士は、六年前のアルゴライトを巡った訴えのせいで、職も家も全てを失いました。チアーズ子爵はそんな彼を見るのが忍びなかったのでしょうか。彼の身が立つよう、子爵家に雇い入れていたのです。

良い人だなあ……。私はこの時、チアーズ子爵のことを単純にそう思ったのです。

「しかしキースは今、妻の買い物に付き合っていて何時に帰ってくるか分からないのです。まさかこんなことになるとは思ってもみなかったものですから……」

彼は申し訳なさそうにそう言いました。

それはそうでしょう。国王と王妃が揃って突然訪ねてくるなんて、普通思ってもみないでしょうから。これは日を改めた方が良さそうです。

ですがリヒテルは明日から暫くの間、視察で王都を離れることになっていました。

そこで、私は一人でキースに会うことになったのです。



先日と同じ子爵邸の応接室。

チアーズ子爵と共に私の目の前に座るキースは、緊張しているのか膝の上で拳を固く握りしめています。黒い髪に黒い眉。そして黒い瞳に黒い眼鏡をかけた彼は、見た目はまだ二十代後半に見える青年でした。

腕のいい鑑定士だと子爵からの聞いていた私は、勝手にもっと壮年の男性だと思いこんでいたので驚きました。

「あら、結構若いのね」

思わずそう口にする、彼はくすりと笑いました。

こういうのを怪我の功名と言うのでしょうか？ お陰で少し緊張が和らいだようです。

「仕事中にごめんなさい。実は今日貴方に来てもらったのは、貴方の持っているアルゴライトのネットワークを貸して貰えないかと思ったんです」

そう、話を切り出した私に、彼は怪訝な表情を浮かべました。

「別に構いませんが、なぜ今頃になってそんなことを言ってこられたのか、理由をお教え願えませんか？ 話はそれからです」

先日、チアーズ子爵からも同じことを聞かれました。

なぜ六年も経ってからそんなことを聞くのか……。それは誰もが思うことでしょう。

でもことは、アルゴラ王国の命運にも関わる問題。軽はずみなことは言えません。

「ごめんなさい。それは言えないの……」

その答えを聞いたキースが不満を口にします。

「王妃様、アルゴライトは希少性が高く高価な宝石です。アルジュール家の娘である貴方はそれを誰よりも知っているはずだ。そのアルゴライトを理由も告げず貸せとは、ずいぶんと身勝手な話ですね」

その通りだと思いました。

自分は何の情報も出さず、それがどれだけ高価のものであるかを知りながら貸してくれと言う。

彼の言う通り、随分と身勝手な話です。

「それでも……教えることは出来ないの」

そう繰り返した私に、彼は諦めたのか溜息を吐きました。

「ですがまあ、良いです。だいたいの見当は付きますから……どうせ、どこかで新たに偽物が見つかった……そんなところでしょう？」

「……………」

この場合、きっと誰もがその答えに行きつくでしょう。

それでも、私は黙っていました。

「まあ、答えられないというのが答えてことなんでしょね？」

するとキースは口角を上げ、私に嘲るような視線を向けました。

見かねたチアーズ伯爵が救いの手を出します。

「キース、王妃陛下に対してその物言いは失礼ではないか！ それに君はこの時をずっと待っていたのだろう？ 確かに君の言いたいことは良く分かる。だが、これは君の汚名を晴らす最後の

チャンスかもしれないんだ。君はずっと言っていただろう？ 自分は鑑定ミスなど犯してはいないと……。それがようやく証明されるかもしれないんだ！」

チアーズ伯爵からの叱責を受け、キースは渋々頷きました。

「分かりましたよ。子爵に言われたら仕方ありません。お貸ししますよ。ただし、俺にも傍で鑑定するところを見せてください。もう二度と、結果を偽られるのは御免ですからね……」

彼の立場からすれば、そう考えるのも仕方のないこと。彼はたった一度の鑑定で、それまで鑑定士として積み上げてきたすべてを失ったのですから。

「勿論構わないわ。それに心配しないで。今回の鑑定士は一人じゃない。アルジュール家の商会で働いている複数の鑑定士に鑑定を依頼しているから……」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

王都の外れ、港からほど近い場所に、アルジュール家の鑑定所がありました。

鑑定所という名の通り、ここでは宝石だけでなく、絵画や骨とう品などアルジュール家が扱う様々な商品の鑑定が行われています。

アルジュール家が仕入れた鑑定が必要な様々な商品は、まず港からこの場所に運ばれそれぞれの専門鑑定士によって鑑定を受けます。そして本物と認定されたものだけが、顧客の元に届くのです。

鑑定所が港の近くにあるのはそのためでした。

こうしてキースと共に鑑定所を訪れた私を、父が手配してくれた五名の鑑定士たちが出迎えてくれました。

「鑑定士長のグランと申します。伯爵からアルゴライトのネックレスの鑑定を依頼されております。鑑定は正確性の観点から私たち五名の鑑定士で行わせていただきます」

年配の鑑定士——グランが一步前に歩み出てそう説明しました。それを聞いてキースはようやく安心したのか、ホッとしたような表情を見せます。

早速、鑑定士たちが鑑定を始めました。その様子をキースが傍で見守ります。

暫く待つと鑑定士たちの鑑定結果が出揃いました。

ええ、本当に暫くの間です。

つまり、それほど難しい鑑定ではなかったということ。

思った通り、五人の鑑定士たちが出した結論は同じものでした。

代表し、グランが報告します。

「これは、アルゴライトではありません」

やっぱり……。実は私は、キースが有り金すべてを支払い買い取ったと聞かされた時から確信していました。きっとこれはアルゴライトではないのだと。

それでは、この宝石は何なのか？

グランは「これは」と言いました。彼は鑑定士なのですから、もし彼の知識の中にこれと同じ宝石があったなら、その名を告げるでしょう。

それを明言しないということは……

それでも敢えて私は尋ねました。

「ではこれは何という宝石なの？」と。

案の定、彼は頭を振ります。

「分かりません。私たち五人の中に、これと同じものを知る者は誰もおりませんでした」

彼らは父が国中から集めた優秀な鑑定士たちです。その彼らが知らないと言う以上、まだ市場に流通していないものだということです。

「では、この鑑定は難しいものだった？」

「いえ、鑑定自体は簡単なものでした。アルゴライトと比べると、屈折率、硬度どれをとっても全く違うものです。五人の鑑定士が鑑定し、全て同じ答えを出したのです。その事実がすべてを物語っております」

そう、この宝石が何かはわからなくても、アルゴライトでないことは明らかで……

グランの答えは、私の予想が正しいことを証明するようでした。

王家の専属鑑定士といえはこの国の鑑定士の頂点。その地位まで上り詰めたダミアンが、本当に鑑定を誤ったとは思えません。

やはり私の予想通り、六年前の鑑定結果は偽装されていたのです。

『父はまた間違えたのか……』

そう言つて天を仰いだりホテルの顔が思い浮かびます。

でも、こうして答えが出た以上、私たちはこの事実と真摯（しんし）に向き合い、対策を講じなければなりません。

私はまたグランに問います。

「先日鑑定したものと今日鑑定したもののどこか違いはありますか？」

ひとえに偽物と言っても、その内容は様々。

本物は一つしかありませんが偽物の種類は多種多様で限りがないのです。

それにもし、二つの偽物が全く性質の異なるものだったなら、それぞれを分けて考えなければなりません。

「いえ、二つは全く同じ宝石……鉱物を加工したものです」

グランはそう答えました。

「鉱物……？ これは鉱物なの？」

つまり、ガラスなど人の手で作られたものではないということです。

「はい。それもアルゴライトに良く似た性質を持つ鉱物です。宝石を採掘できる鉱山の近くでは、似た性質を持つ別の鉱物が見つかることがあります。周囲の温度やかかる圧力、そして土に含まれる成分など生成される要素が似ているせいですが、これは恐らくはその類（たぐい）のものではないでしょうか」

「……では、この二つはアルゴライトと同じスピラノ地方でとれたものということ？」

「まあ、断定はできませんが恐らくは……。ですが、さすが王妃陛下。アルゴライトと聞いただけ

で、すぐにスピラノを思い浮かべられるとは！ そうです。アルゴラから仕入れられた点からみても、仰る通り、これらはスピラノ地方で採掘されたアルゴライトとは別の鉱物という可能性が高いでしょう」

スピラノ地方……。アルゴライトの産地として知られるその場所は、アルゴラ王国の西の果てに位置します。かつては農業を主産業としていたアルゴラ王国の中で、スピラノは領土の端に聳え立つ高い山々のせいで日の光が遮られ、植物の栽培に適さない……そんな貧しい土地でした。

ところが今からおよそ五十年前、その領民達を苦しめ続けていた山の中から、アルゴライトの鉱床（こうば）が見つかったのです。それ以降アルゴライトはスピラノを……そして農業国だったアルゴラ王国を豊かに変えていきました。

というのも、先代国王のリチャード陛下がアルゴライトの美しさに目を付けたのです。

彼はアルゴライトの鉱床を国有化し、その販売収益を王家が独占する代わりに、鉱床が見つかったスピラノには、アルゴライトの加工を一手に任せるという王命を出しました。

そして今では、アルゴライトの販売は国の基幹産業となり、加工を任されたスピラノはアルゴラ王国一の工業地帯へと生まれ変わりました。

「ちなみにですが、アルゴライトはダイヤモンドよりも高い屈折率と分散率を誇ります。そのため光の反射により七色に輝く。それに対しこれら二つは、屈折率や光の分散率がアルゴライトに比べると低く、輝きが少ない。何より石自体の硬度が違う。同じ鉱物は基本的に硬さが一致するので、そこで見分けるのがよいかと」

立ち読みサンプルはここまで

何も知らない私にはアルゴライトにしか見えなかった二つの偽物ですが、見るべき人が見ればその違いは明らかなのでしょう。

グランは私に、アルゴライトとの見分け方を教えてくれました。

「それともう一点。お預かりした二つにも、大きな違いがあります」

グランはそう言って、六年前のもの——キースに借りたネックレスと、先日見つかったもの——父が預けた指輪。二つのアルゴライトの偽物をテーブルの上に並べて置きました。

「大きな違い……？」

「そうです、研磨方法の違いです。先ほどお伝えしたように、この鉱物はアルゴライトより柔らかい分、加工がしやすいという特徴があります」

グランは、手元の偽物に顔を寄せました。

「こうして見比べて頂くと分かりやすいのですが、今日お預かりしたこちらのネックレスは、従来のアルゴライトと全く同じ加工が施されていました。対して先日預かった指輪は全く別。簡潔に言えば、この鉱物の持つ特性を理解した上で、最大限美しく見せるための加工が施されていたとでもいいでしょうか……」

「……それは一体、どういう意味？」

私は首を捻ります。

「そうですね……。サファイアとスターサファイアの例が分かりやすいでしょうか。サファイアは透明性と輝きを引き立たせるための加工が施されます。反してスターサファイアは、星、即ちス

ターの部分がより美しく見えるよう加工されることが多いのです。それはすなわち、その宝石が持つ本来の美しさを最大限に引き出すための加工方法が異なるということです。今回、アルジュール家からお預かりした指輪は、この鉱物がもつとも美しく見えるように加工されていました。アルゴライトに似せるのでなく……言うなれば偽物として作られたものではないとでも言いましょうか……」

偽物として作られたものではない……
グランはそう言いますが、例えばそうであったとしても、アルゴライトとして仕入れられたものの中に混入していれば、それは真つ赤な偽物で……

でも、六年前の偽物と、今回見つかった偽物がどこか違うのだということは伝わりました。

それに、これで一つだけはっきりしたことがあります。

それは、キースが鑑定士として職を失うことになったのは、間違いないくダミアンに嘘の鑑定を強いた王家のせい。ならば、王妃として彼に必要な償いをしなければなりません。

「キース、本当にごめんなさい。これで六年前の貴方の鑑定は、間違えてはいなかったことが証明されたわ」

謝罪の言葉を口にした私に、キースは驚いて目を丸くしました。

王妃である私が、まさか平民の自分に詫びるとは思ってもみななかったのでしょうか。

「許してくれとは言いません。ただ、償いだけはさせて下さい。そして、貴方がもう一度鑑定士として生きたいと望むなら、私はここで働けるよう父に話すわ」

私はキースにそう話しました。